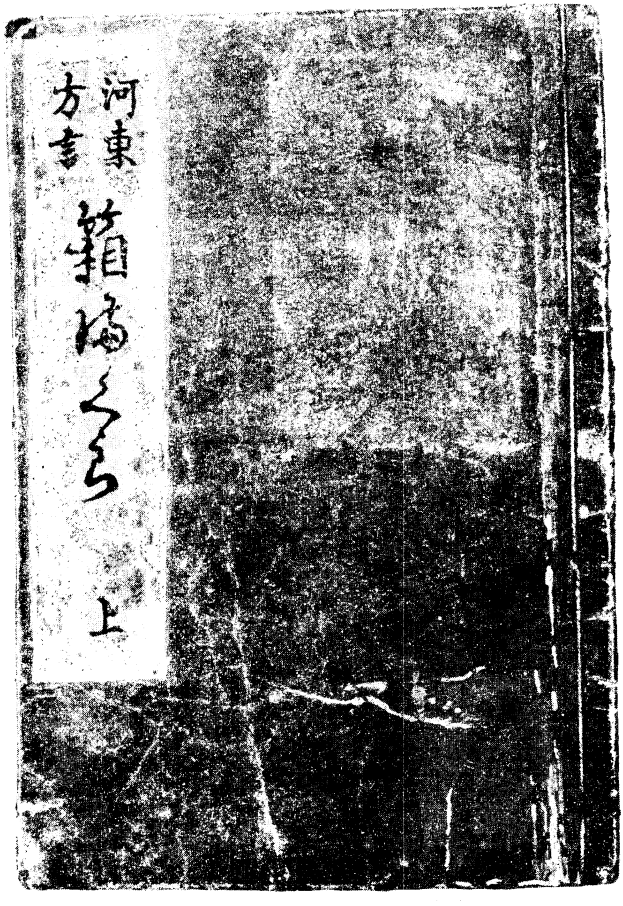
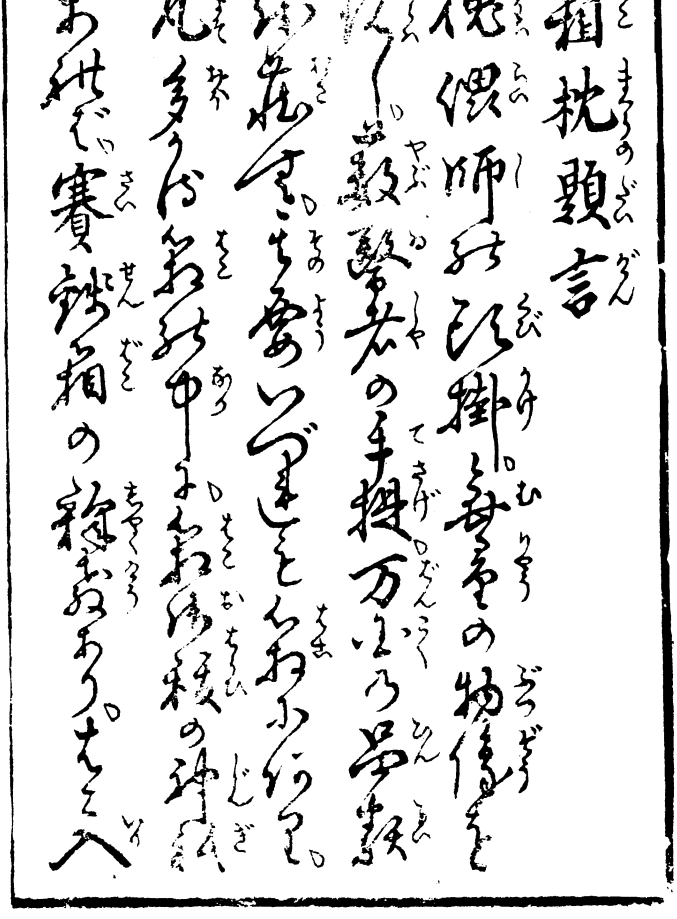


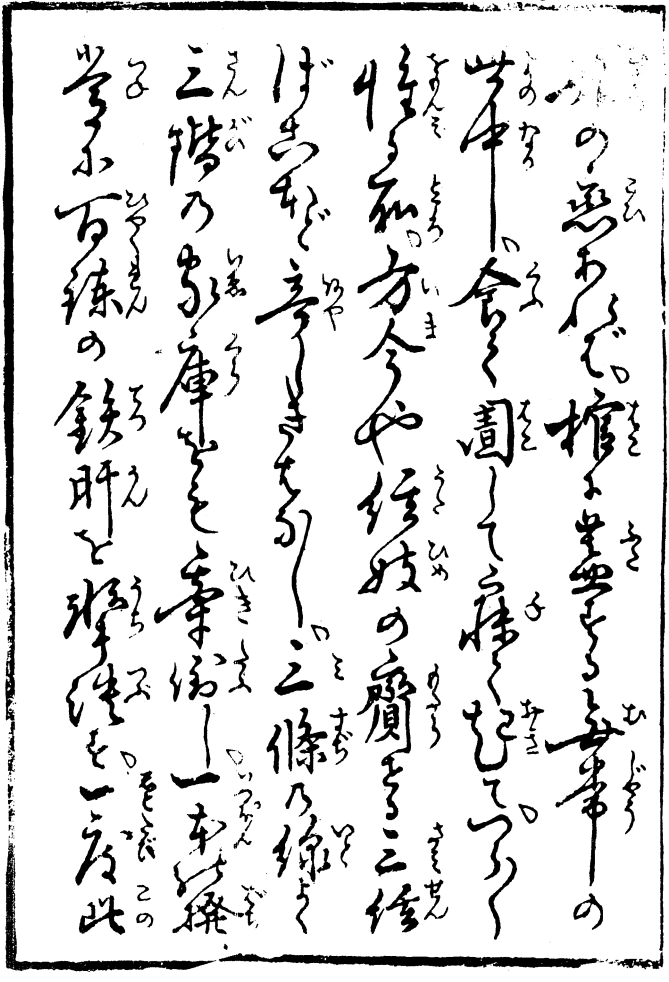
表紙	コヨ	四寸
	タテ	五寸八分
木文枠	コヨ	三寸四分
	タテ	五寸

箱枕題言

傀儡師の頭掛。無量の物像を現し。數醫者の手提。万國の品類を藏む。其要いづれも箱にあり。凡多かる箱の中に。箱御秡の神祇あれば。賽錢箱の釋教あり。こは入娘の戀あれば。



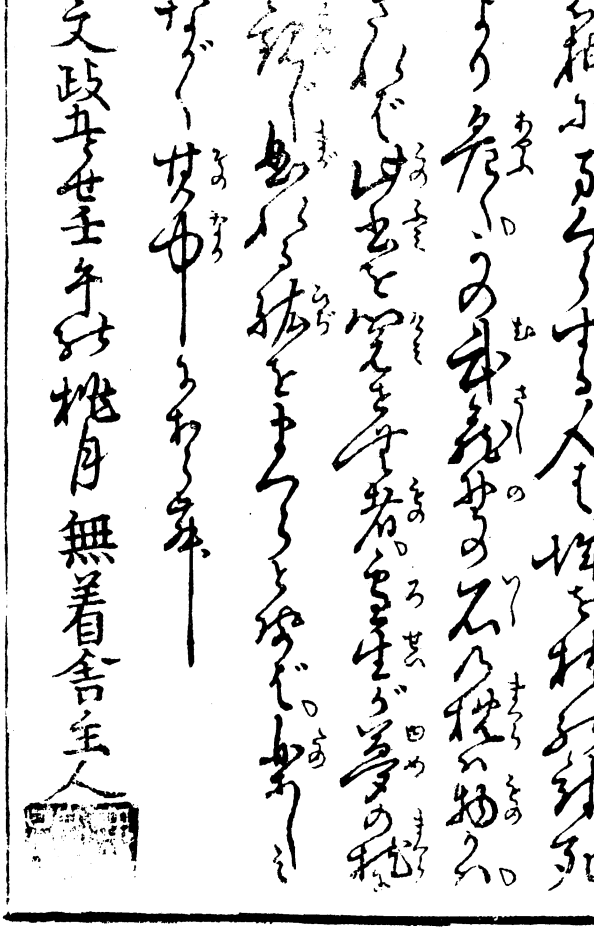
棺に蓋する無常の世中。食て固して寐て起て。つら〳〵惟る所。今や紘妓の腐せる三紘ばこほど奇しきはなし。三條の線よく三階の家庫をも牽倒し。一本の撥常に百錬の鉄肝を撃潰す。一度此箱に



まくらする人は。城を枕の討死より危く。かの武蔵野の石の枕は物かは。されば此書を閲せむ者。虚生が夢の枕に覩じ曲れる肱をまくらとせば。樂しみながく其中にあらむ

文政五壬午の桃月

無着舎主人印



自序

もろこしの孫楚は。流れにまくらして石に漱ぎ。今どきの哥妓は。箱を枕にして流に身を沉む。竹田のからくりは。箱を開て露れ。哥妓の爪甲は。箱を閉て藏せ

自序

もろこしの孫楚は流れにまくらして石に漱ぎ。今どきの哥妓は箱を枕にして流に身を沉む。竹田のからくりは箱を開て露れ。哥妓の爪甲を閉て藏せ

ば。近江が機關より。藝州の手管ぞ怖し。嗚呼。世人魂を有頂天の外に飛し。身を問ゝの河の底に沉むるも宜なる哉。

文政五のとし花月

大極堂主人

青川山七郎

金釵翠黛治容新
三十六色又蕩春
百鍊鐵肝摧作絮
剛腸到底屬何人
呑海道人

目次

着色　客人の田舎乃大じん
雜奥寐　絵姿い近ぐろうくまるみ
右意雜奥寐　居ぐしこの手ぐい
許情雜奥寐　ふうだわきのあ
相識　ぜ木のつ人て
同心　一つ屋りのまろまの
　　町家の利用
　　そちらのもちて
　　りての名人
　　羊ぜ人の馬れ
　　ぐま人の紀そち

河東方言 箱枕巻之上

大極堂有長編

着色

旦 おのぼり客にて。としごろ四十余。よく肥て。色くろく。せい高く。緋縮緬にびろうどゑりの縞絆。郡内じまの下着。八丈じまの上着。茶うの袴。黒ちりめんの羽織。扇をばち〳〵ならしてゐ里れん中でもなく。弁慶とも見えず。貨は旦る。風那の俳諧の先生ゆゑ。振舞ながら。丁寧にもてなす故わへれど。兵九國よりつれてのぼりし手代と見ゆかり難し。こんでおひげの塵をとり。世わたりするものゆゑ。京都へも兩三度のぼつたこともあるゆゑ。どこともなふ様子才兵へ一目見るからしれた宿の亭主なり。よし。もつとも四人一座三四度めのあそび。旦さかづきをもちて。ちよばらんとついで。中ゐお十おはやい事じや。もうちよばらんお覚えたな。九旦那。此むうから太夫さんや。△さんをおよびなさるが。いつそこゝでどれぞ藝子にいろ付をなさりませぬか。里それはよい思ひつきじや。太夫も。白人も。かの段にいたつては。どふしてもくろうとじやが。げいこの御寐間は。お國の奥様や。おてかけと同じとで情がふかい。旦此間うちよんだ中に。まんざら惚た藝子のなきにしもあらずじや。中ゐお八誰さんでおます。わたしちよんべいいたしませう。才まつたり。旦那さんの御氣に入たは。コヨツ。はる野。なつ葉。秋治。ふゆ吉のほかには。貳てうつゞみのふりそでゞもあるまいし。爰のかゝへの舞子でもなし。なんぼ。はしまめでも。太この可八がをいどへ御めもとまるまいし。察するところ。はなの中なる花の山。ながめもあかぬ。のろさんであろう。中ゐお七あの子はやかたもよし。おもしろい氣だてのあるげいこさんじやが。誰が目もちがはんもので。これまでお呼びなさつた子ども衆のうちでは。いつちあの子がよろしい。中ゐお八才さんのちやりはのけて。旦那さん。春さんにあたりがつきましたか。旦皆がそうほめれば。嫌でも。すきでも。さうせざなるまい。中ゐお十まあ。相談はあとにして。皆さんをおしらせいな。里それがよい。中ゐお八。たつてよびにやる。程なく皆さきたる。七旦那さん。御袴をおとりなさりませんか。旦ヲイトたつて袴をぬぐ。お十つぎの間へもち出て。たゝんで片附ける。一體だんなの心のうちでは。觀賞をするやうに。田舎氣質で。げい子にはかまをつけてゐるを。見せたいばかりで。今までつけてゐたるなり。それより三味線太鼓の大きはぎの座敷となれども。旦那はとかくふざけて。はる野が九見てと才兵衛さかほへばかり目がゆくをり。

ん。いまのをよろし。[才]こゝろのんでいます。ト お七がそでを引て勝手へたつ。三人の中居の つもでも。お七がをもにはる野をほむるゆゑ。さては平ぜい心やすきとおもふて。色付のかけ合をする也。やくそく十ウ。まくら金五兩にて。あらまし相談できて。才兵[七]春さんへはもとの座へかへる。お七きたり。男しゆかちよつと。トいふはてれかくしにて。實は勝手へよびだし。ぐわいの相だんをする也。きて其をうだんにいろ〳〵あれど。まづやかたへは東十ばかりを通して。生の五兩はないしやうにして。子供のてどりにするとあり。内しやうに金子の入わけは。だいてゐる太こ。しめてゐる男などの入用にたしてやり。または。有の男や。かみゆひさんつれて。じまいの芝居行。あるひは生洲へつれて行はの。といふ入用なり。さて。また。茶やによりてもつてゐる子供と見ると。わがかゝへの子どものやくそくをしてやつて。といぢれば。中居は。前だれをしておくれとせがむ。はる野は内證の相談をたのみて。座敷へもどれば。[太こ][可八]フンじやわいな。トいふは。春野がかつ手にてとなふはぢらふ色あつて。且那のかほを見て。見ぬふりをしてゐるところから。こいつくはいの出來たのと知り。[春][可八]さん。なんじやいな。[可]ハイおめでたふ。ト笑ふは一たい。平生おはるとあまり中もよくなくにもなるしと。すこしはらだち。其うへ。此客はおのぼりゆゑ。ながき事もなしと。心でうなづき。始終つとめ惡きは。まだ新まいげいしや也。古藝者なれば。こふした[九]可八がなぶるをよそうじや。のろさん。そんなしらにせをいふても。まんざらであるまいかな。[はる]そのやうに問非をおかけても。なにも陽氣なとはないわへ。[可]御祝言は今よひじやと。おだい所はどつさくさ。ト一くち淨るりをかたる。中お七は。兩人があまりなぶるを見かねて。[七]可八さん。おまへ何じやいな。そんなぬめたな。はるさんじやござりません。[冬吉]大ん年增ゆゑ。ち　お七どん。その太こさんやら半ぶんに。いなしてしまいゝな。[可]お七さんばかりか。おまへさんまで。そふかすをくわされては。コリヤあたらしきせるで。一向たまらん。[七]それでも口あひかい。[冬]もう。勘忍してあげいな。あれをいほふばかりに。いろ〳〵の事を。ごて〳〵いふたのじや。トいひすぎし。言葉のとりなしして[お八]わつさりと。ひとつお解きんか。もふ夜半前でおますさかい。九兵へさん。いつものおひめさんをしらしませうなア。[九]今よひは。早いがよからふ。トてうしを合すも。最前はる野をなぶつたがわるかつたと。後悔の所から。せめて。且那をはやう寐させて。機嫌をそこなわぬやうとの。心づかひなるべし。[十]どれ奥様たちをしらせませう。トたつて行げいこみな〳〵哥一ツひきて。しらけし座敷もまた〳〵元のさはぎになる。[十]きたり。皆さん。おしまい。[可八]モウうちましたか。[十]一ばいじやといな。トそこら片附かける。可八とりつゝいで勝手へ。[七]且那さん。さよなら。おさかく手へひ。つきをお預り申ませう。且それもよか

らふ。[初八]可八さん。何をちよかついてじや。もう打やつておいて。お歸りイナ。[可]おまへさん。ちよかつくとおいゝるが。うたらつくよりはましでござりませうが。ハ、、、ハ、、ア。[トおかしうないと]を笑ひな旦那おありがたふ。どなた様もおありがたふ。[ト歸る。][十]箱をいどなたも男衆がまつてゞござります。藝子(げいこ)みな旦那さん。今晩はだん〳〵おありがたふ。どなたも。お近いうちにお願申ます。[冬]お七どん。お八どん いんでこふへ。[中ね]人。よふお出たへ。[冬吉をはじめ。こみな〳〵歸る。春]野ばかり。しゞう何もいはずに みな〳〵といつしよに。勝手へ出ると。旦那びつくりして。[旦]九兵へ どふじや。いまのはでけぬか。[九]よろしうござります。衣裳を着かへてまいります。[七]旦那さんあちらでお休みなされませ。[旦]いづれも達の相かたは。どふしてこぬ。[七]皆をもてへみへて居ます。[ト燭臺一本もちて。だんなの手洗に行に。あかりを見せ。みづなどかけて。寐間へまんないして。]これへお休みなさりませ。[ト屏風を引まはす。][旦]ごふてきにゑふた。[七]お薄でもあげましよか。[旦]インエ。それには及ばぬ。[七]ごゆるりとおやすみ。[ト歸る。][十]茶。煙草盆も。[ちきたりこんこん]今ばんは思召どふりになりまして。お樂しみでござりましよ。[旦]田舎者のせいか。はづかしい。ナゼ。はる野はこゝもとへ見へぬ。[十]こはひいなかさんじや。はるさんは今おいでゝござります。[ト立て行。][春]衣裳を着かへきたる。としのころ貳十二三。色白く。少しこへめなるかた。勿論うつくしく。きつけは黒縮緬に。山ざくらを一ト ふきヅゝ。本両にそめぬき。雲がたに砂子をあしらふた上着。松葉中がたのせんさい茶。なんきんのぐるりの下着二ツ。ひもんちりめんの長襦袢。帯ははじめよりしめてゐたる。すゝたけ地の古金らん。もつとも衣せうをきかへる。きかへぬにかゝはらず。色付の夜は。ほかの藝子と一度に勝手までたちて。客をさきへ寐させてから來る子ども多し。惣じてかやうな座敷にて。客もよく。どふかわしへ札がをちそふなと思ふ時は。いつにても衣裳をゆすつてくる也。この春野もまづくめんがよき方ゆゑ。着かへもうちにあつて。今夜などは少しゆすつて出たちたるなるべし。[春]もしへ。九兵へさんといふおかたは。よう人をおだてゝじやなア。[旦]あれはひようきん者じや。そして。まだ寐ぬのか。[春]いまみなさんがおやすみた。こちや早う參じやうと思ふてゐたけれど。九兵へさんがをなぶりるによつて。見合てゐました。[トあんどがあまり枕元]ゆゑ。少しをゝのけ。燈草すいつけて出す。[旦]とつてのみ。おてまへへ。これへはいるまいか。[春]ハイ。[ト上ぎをぬぎねる。][旦]おてまへは。なんばになつてじや。[春]齢でござりますかへ。[旦]さやう〳〵。[春]はたちでござります。[旦]おれらも。京都はこんどがはじめてじやが。聞たより。思ふたより。京女は。どれも

〳〵上きりやうじや。〔春〕その中にわたしのやうな。無細工な者もござります。〔旦〕おてまへは。取わけいのちとりじや。〔春〕あのわたしが。なんぞ上げましたい。〔旦〕イヤ〳〵。ほめたとて。なにも下されるには及ばぬが。おれらが國元に。今小まちといふて。しこ名のついてをるげい者が。いちばん上きりやうじやと思ふたが。おてまへよりは劣つたものじや。〔春〕そんな美しいおかたを。常住見てござつて。わたしのやうな者を贔屓にしておくれるは。おうれしいが。いつそ氣がをけます。〔旦〕おれらは氣はをけぬが。なにか取こんだやうで　そむない。〔春〕　とはへ。〔旦〕　はしらぬのか。ド　しへ　らふ。る。

少計 ちよつぼりといふ事にて。此里の通言也。これはランの反しりなれば。ちよんぼりをのべて。ちよぼんと心ある客人のいゝそめしならん。

少兵衛 ものゝ世話するとなり。これは紙札袖かどみの宗玄あん室のだんに。ちよんべいといふ名の。世話をやくものあるゆへ。いゝ初しにや。

包耻 なに事によらず。てれた場をいゝくろめたり。または。しらぢにてをしかくす事をいふ。

抱懷 たいこもちとわけあるをいふ。その心は越後じゝが。前にたいこをだいているといふから。いひそめしなり。

着褌 見世の男とわけあるをいふ。店の男をまはしといふより。しめてゐるといひはじめしなり。

問非 やまをかけていふと同じとにて。無き事もあるやうにいゝかけ。又はかくしてゐるを。知つてゐるやうにいふて。繰りだされたを。問非にかゝつたといふなり。これは藥屋言葉にて。叱られたとをいふ。こゝろは。なにゝよらず。物の糟をくふては。あまり心もちのよくないにたとへるか。

食糟

西走東走 座敷にじつとゐずにあちらへゆき。こちらへゆきして。あはてゐるを。ゑらい。ちよかじやともいふ。

自似 まとのやうに。虛言をいふたり。或はみすゝ知れた事を。客にたづねたりするをいふ。

野暮輔評曰

御登りの閨中の趣。さしていふべきとなし。安穴先生の大平二曲に。受惡御客金故脇の場なるべし。併かゝる寶客は。得て根引の相談にをちて。思はずも川竹の憂をのがれ。中國とやら。九州とやらへ。御副室となりて行よあり。絃妓はもとより好むかたにはあらざれども。光次先生の威勢辞するによしなく。且は。まづむちやくちやしたる館のすゝはらひの爲に。いつぱいとかいふ心もありて。止事を得ず。ともなはるゝもあるべし。ポヒン〳〵のびいどろより。あぶなき買物なりけりと。發足

のあとで宿屋がいふならん。

雑魚寐

【市兵へ】としは廿八九にて。一とふりの男ぶり。小もんつむぎの下着。をくじまの上着。袖のてつなんどの羽織に。博多のをびをメていれど。棚方の手代にて。中宿よりきかへてきたる也。此きやく大ぶんぜにをまきし御利生に。少しすいの道を覺えしかはり。大ぶん内證の工面あしく。追付ふねをもするやうすを。茶やもうす〳〵きゝて。つゞもり〳〵には案じてゐるをも知らず。手代ぎやくのくせとして。茶やへくるともの事。けんぺいをいふゆゑ。西石とちがひ。新地にては。アイツメといはれると多し。【連中十兵へ】兩人とも。市兵へ同やうのふり。風俗にて。この茶やへも。市兵への引つけにて來【鶴松】としは廿四五にて。せいり。ひめになじみ有。たかく。細面。色あさぐろけれど。陰分よき風ぞく。雜をいへば。ちとけんなる真。紮ちりめんの名りつますそ。内絲にて桔梗のぬいつぶし。下ぎふたつ。上ぎは當世茶ちりめんのすそのかたへ。黑いとにて。同じく桔梗をぬいたるは。なんぞあ【つる治】の兩人ともとたりのある好みなるべし。

ゐ。衣裳真だ【たいこつる八】きしじまの上着に。どこでちは畧す。うかして來たか。くろ七〻この羽織。としごろ三十ばかりにて。真やくえもいはれず。子分弟子分でもなく。名まへもあんどの中より上へ出てゐるたいこ。だん【つるまつ】市さく座敷の酒事しやれ有てのうへ。市さん。つる吉さんはどふでございます。

【市】とふに。まづにしてしまふて。今はやもめじや。【つる松】しらにせいゝな。【つる八】銀だましではございません。しんけん。此間そく五ツで。すつぱりに成ました。トいふは市兵へが。した地ぐわいをしていたゑ子也。市兵へをいやがつてゐる故。わるうあしろふ處から。市兵へもかんてきにて。まづにはしたものゝ。心では思ひきるとならず。いまさらお山もまけをしみでよばれもせず。此鶴松をやすふこかさふと思ひ。つる八に相談すれば。太このくせにて。じぶん花をうるために。できる。できぬにかゝはらず。どれでも出來ますといふもの也。しかし。此つるまつは。きまへ高ぶとまつて。たとへ。此きやくよりまだぐつと錢をまいても。手代ぎやくにはこけぬといふ奴なれども。これも花をうりたさに。よきやうにつきあふてゐるなり。

【中み】手をたゝいき。白さんをおくれ。ハイ引といふて。小めろ。らうそくを持ちきたる。【つる八】うけと白さんおそしと見かへり給ふ。トたてかへて。今よひはおふきに奇妙じや。つるまつさんに。つる野さん。つる治さんに。此つる八さんじやないつる八め。合て四つるじや。四つる雪の日。下の闕ぢをときてゐるハ、、、ハ、、、。【中み】ほんに。よふそろひつるじや。【つる八】コリヤ。ゑらい。そのわけかたらん四つるきけ。クロタイクロタイイ【市】ア、やかましい。もう地ぐちはおくまいか。其かはりそれ。トだのみしわけある故也。【つる八】ヤア。コレハ。ハ、。ハア引。ありがたふ。トいたゞき。つむ丹頂りの上にのせて。たんてうのつる八とはありがたい。小めろきたり。中みにゝやきて下へおりる。【中み】もう

夜半まへじやによつて。市鶴さん。小つるさんをきゝにやりましたが。お二人ながらできませんが。どなたぞ。お代りをよびにやりませうか。此二人のおやまは。五兵へ。十兵へのあいかたなり。五兵へ十兵へ もふ歸ります。トロではいへども。かんにさはり。それより引かけて飲む。中ゐ たゞ今うちまして。つる八さんの迎いがかゝりましたが。どふいたしませう。市今夜はもふいにませう。中ゐ つる八さん。おしまい。つる八ハイ。市さんおありがたふ。どなたもおありがたふ。トたちかけて。つる松さん。今のはよろしいか。トいふは市兵へがたのみしと。ちよと最前はなしてみたれど。つる松いやいなといふてとり合ねど。市兵へへのいひわけにていふなり。つる松 わらひながら。よろしいわいな。つる八歸る。つるまつ煙草すいつけ。市兵へにやる。評曰。このすいつけにじあいあり。すい付てわたすとき。客とらふとする時。はなさぬ故。客げいこの臭をみると。につこりと笑ふてわたすとあり。いま一だん上のげいこは。煙管をわたすとき。客の手のうちをきせるでぐつと抑ると。客かほをみる。わらふてわたせば。外よりじあいするとしれねなり。けつのげいこは。多くかくして客にきをもたす也。」市五兵へさん。十兵へさん。こんやはお前がたの相かたもできず。かた〳〵。此一座雑魚寐とでかけてはどふじや。あいかたはけず。二人のげいこに氣の毒あるゆゑ。もしできるともあらうかと。五どふでやけた手がたではあるし。はなしの種に。うつくしものゝねきで。寐て見ましよ。十それもよかろ。中ゐ それはよろしうござりませう。さやうなら御酒はまはして取ませう。トさかづきをあづかり。小めろをよび。二人して。そこらを片附ける。げいこ三味線をしもふてゐるうち。中ゐ置炬燵をもちきたり。ふとんを三方にしき。上にたん五わしやおまへとねよふ。中ゐ つる松さん。大せいさんじやさかい。わたしは下でねます。つる松どふでもよろしい。此うちこゝへ寐ると。六人のしやれあれど畧す。箱をまくらにはせねど。用心のためをびをしたまゝ。まのげいこねる。つるの つる松さん。きゝいな。此じゆ。川ばたのお茶やでじんでこなお客とざこねをしたと思ひナ。そふしたところ。花車さんも。中居さんも。きてねてくれはせず。夜中どのやうにこまつたとおもふてじや。トいふは。また〳〵今夜わやくをせられぬやうにとの謎にかくいふ也。つる松 おまへよふしんぼうしてじや。こちやどなら下へおりてこます。つる治 わし。そのお茶や。さして見せうか。つるの 大てい知れたもんじや。つる治 こちの店の子がまくうちとわけがあつて下札のとき。講外になつたお茶やであろうがの。つるの ア、そこじや。あこのうちは。げいこ小の義理は。ちよつともかまはすと。 たらよし。 ゝばさんばいうるはといふ氣じやによつて。もと

をいへばかつばのせうぞくじや。[十]さふかたふいふても。のろはさしたそふで。今夜は色がわるい。[つるの]おせはさん。うか／＼どもは。　せうか知らんが。なんぼ。わたしがやうな藝子でも。さふやすふはこけぬわへ。[市]へこまさやすふ賣るついでに。太こもちはあじなもので。茶やしだいで。花に高下があるナア。[つるの]なせに。[市兵へ]大茶やで。みせじまいをかふときは。やはり花でとつて。三ばいかはしはせぬが。こゝなやうな内では。おまへがたとおなしとで。さんばい買はせられる。トいふは。じぶん太この店じまいかふた事はなけれど。きゝはつゝてゐるゆゑ。見えをいふなり。[つるの]さよかいな。[つる治]こちやどは。お客がひいきにしておくれて。大也。小也。義理をかけてをゐてから。ごて／＼いはれた時に。ことわりをいふと。そのお客が。それぎりに呼んでくださらぬによつて。そのごれん中や。御茶やの人に。なせにじやと尋ねられた時。まんざら。こふ／＼じやともいわれず。どのやうに困るとおもふてじや。[市]それは。おまへがいやな客にても。じあいをして引つけるがわるい。[つる治]さふじやけれど。すきなお客ばかりに。つとめていては。商賣がでけませぬ。[市]そろ／＼と内證の尾がでるぞ。[つる松]イヘ。ほんまにいナア。商賣じやとおもふて。よいくらゐに調子を合すと。いまのお客のくせとして。をそいか。早いか。せつびくどかれるゆゑ。そのときけるとつゐ夫なりじや。しかし。そこをけられても／＼。二年三年おふて來て。はらをうられて見いな。どんなげいこでもこけねばならぬが。その樣にはらのある御客はいまはないによつて。こちらも十分にもつてゆくと。早ふくどかれて。御客がおこるから。いまは七八分にもつてゆくがよい。ト市兵へに。それといはずにきけがしにいふ。[つるの]とつとその通りじや。[つる治]こちのとなりの子も。町へひかされてじやさふな。[つる松]そしてあれが手はきれてや。[つる治]マアきゝいな。あこのかゝんが。みんなの知つてのとふりのじや人じやよつて。せんど宇治をけんぶつに行といふて。三人づれていきしなに。ゑんきり神さんへまいつて。かゝさんがどふぞ切ますやうにと。拜んであつたといな。それからどともなふ。つる介さんの氣もかわつたかして。いまでは三桝やの店の子をしていてじやはへ。[つるの]あのゑんきり神さんは。奇妙じやはへ。わしがかのあれに凝つてゐた時分に。こちや知らなんだが。かゝさんが二度も參つて。お供へのまゝと。菓子とをとつてきて。こちをだま

してたべさせてゞあつたげなが。おまへも知つての通り。あれに一生逃ふとは思はなんだが。つゐきれたが不思議じや。[つる治]そふかいな。[つる松]たとへ。まいらいでも。十八夕出して御きとふしてもらふと。どのやうな縁でもきれるといなァ。市兵へはじめ二人のものも。くといて見やうか。わやくをして見やうか。との心にて。ざこねをしたれども。このげいこ三人とも。けつなるゆゑ。ものゝいわれぬやふ手のだせぬやうに先をこされ。心づもりもちがひ。むしやくしやしながら。つゐすや〳〵と寐入りかける。をりからおもての戸をドン〳〵。

[まはし男]ハイおむかいでござります。

四郎様

御ぜんじのらうそくの事也。これをしろさんといふ事は。今より貳十年ばかりまへ。井筒一力へゆく客に。上京のかぎや四郎兵へといふ人。ふと會津蠟燭をいづゝ一力へうりし故。しろさんといふきやくの名をそのまゝ。らうそくによびし也。それより今は生す料理やまでも。しろさんといへば。らうそくの事となりて。今にても。井づゝ一力は。らうそくをうりこむ家名にて。近江や太郎兵衛がうりしは。あふみ太ヲおくれなどゝ。らうそくの事をいふ也。これはいまだほかへはとふらず。

神代子

野蒜なきやくや。すべて當世に合ぬ事をいふものをいふなり。意は神代の子といふ事にて。當世にはづれてあはぬといふ事也。

幕内

やくしやとなじむ子をいふ。こゝろは役者のまくの内にゐるゆゑなり。

講外

神樂講とて。いまはとの外きびしく。茶や其ほか子どもにいたるまで申合をそむき。惡しきとあるときは。行事の相だんにて。茶やのあしきは。こどもをおくらず。子どものあしきは。茶やをたらげ札にする也。其うへにて此講中をはねるゆゑ。講外になるといふ也。それをあやまりてからかいといふもおかし。

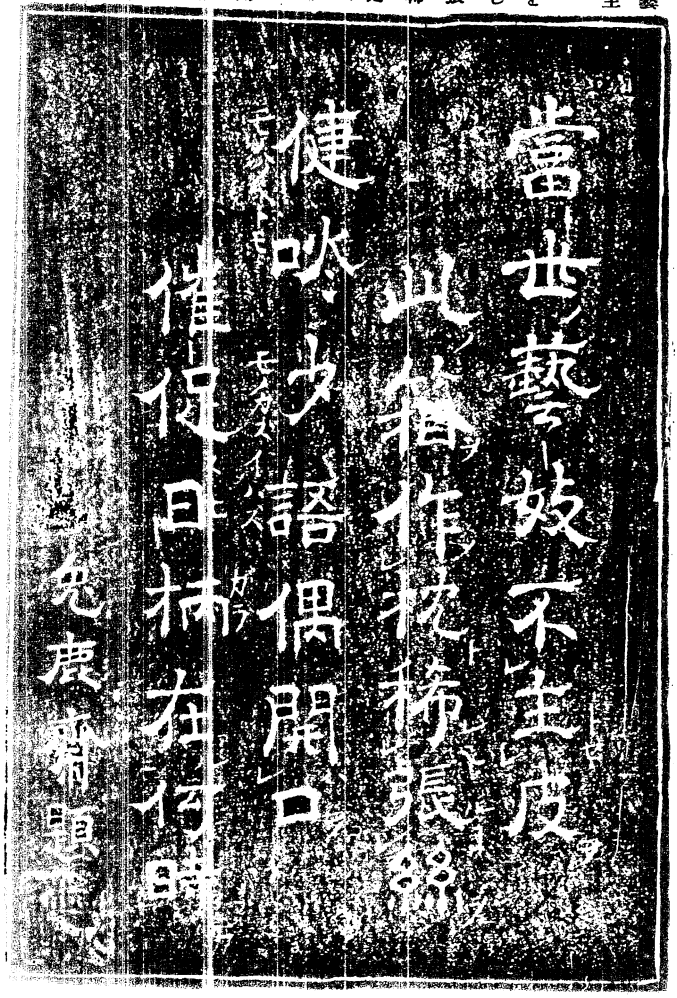
野暮輔評曰。

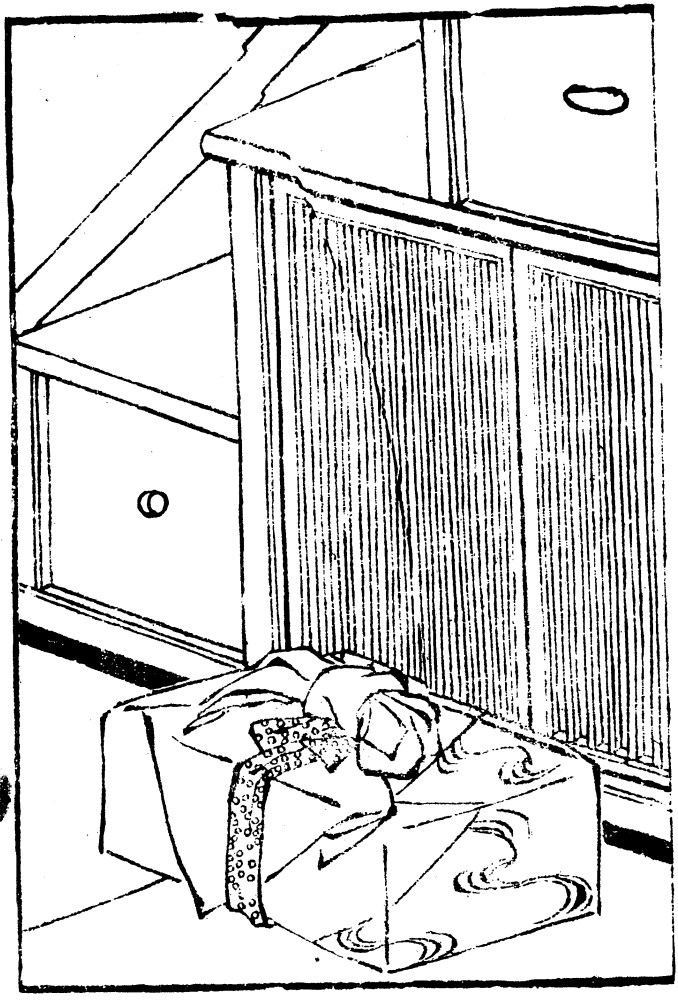
この條はじめ主管客の物馴良に。たま〳〵ざこねするありさまを寫出したる。眞に妙なり。しかるに。三個の絃妓すこぶる古狸連にして。一ツざしきに寐たりといへども。傍辺に人ありともせず。おのが儘なる話にこかして。余所ながら市兵衛らが奸邪をふせぎしは。其夜の形勢眼前に見るがごくにして。奇絶といひつべし。三個の絃妓が話しの中へ。市兵衛のみ折ゝさし出たるもよし。五兵衛重兵衛兩人の心中さこそ工面のちがひしものにて。面白からぬ夜をあかす事かな。かくとしりなば胃のほどにとく立歸るべきものをと。後悔するにつけても。いよ〳〵ふさぎしとならんと。推量られて氣のどく也。すべて此段初中後の引張。おのづから眞景にかなひて感ぶく。また條〻に妙言多かり。このだんをもつて。卷中第一とすべし。をしむらくは絃妓のはなしに。今一ときは是等の客に聞せても。くるしからぬはづし話をさせざるとを。

河東
古書

當世の藝妓皮を主とせず。此の箱を枕と作して絲を張ること稀なり。健啖（モノハクヘドモモノ）少語（カズイハズ）偶口を開（ひらく）ば、催促す日柄何時か在る。

兎鹿齋題





らくま箱

河東方言 箱まくら巻之中

有意雑魚寐

大極堂有長編

市としは廿三四にて。いろ白く中ぜい。黒はぶたへの上着に。より上田のはおり。髪のゆひやうから。取なし風俗。きつとおまへ。ちよつとしたいやみのない侍客。來いと。氣おくしたから出てきたが。かのはどふじやへ。花車わたしの思ふたとふりに。參じたによつて。おまへさん。なんぞいわひ事しなされ。今しらせておきましたから。ほどのふ御出るであろふ。しかし。まだやかたへは通さぬよつて。ほかな子ひとりおよびんとわるい。といふは。此客よきほどにあそび。買の手ぎわもよきゆゑ。なじみのげいこ龜まつをすゝめたる也。しかし。枕がねや。束にもめると小口をかたふでるから。花車もすかさず。それは一とふりのお客の事。あの子もおまへさんにはきてゐるから。雑魚寐からはじめて。もしやかたへしれたとき。束の四ッ五ッ出せばよきなどいふから。市村もそれならばと承知ゆゑ。げいこにも。その由にてすゝめしところ。龜まつもまんざらにも思はぬ客也。とにそでつめて問もなく。やう〳〵このせつうれ出して。をやにも。人にも。ほめられるがうれしさに。ひとつは商賣ぎもあり。かたく〳〵せちゆゑ。けふ市なにもかも承知じや。花車市村を二かいへあがらせ。花車より市村をよびよせたるなり。さけさかなを出し。二人のんでゐる龜きたる。としは十七八にて。色白くすこと。松丸貞にて。うつくしさいひ分なし。上着はむらさきの山まゆいりの縮緬。をきあげのきくをうち出しにしたる裾模様。ひの下ぎふたつ。あみどりをぬひたるそろへ。だんざらさうつしの色絲いりの金らんの帶。さげをのうはゞ。あたまも何かは知らず。眩き ヨヽしんど。トすはる。花

おまへ。なんと思ふて。今夜はゆすつておいでた。龜市村さんに見てもらをと思ふてじやはへ。花ヨウ〳〵それをうけていゝかへ。そうてづゝりいはれては。何ぞうけ賃もらはねばならぬ。市つるが。そういふてくれゝば。嘘にもうれしい。花ナア龜まつさん。今夜龜治さんにせうかとおもふたけれど。あの子は御託宣じやよつて。おゐて浪治さんをよびにやつた。といふは龜松あの内へ通さぬ故。万一しれたとき。此茶やへねだつてきた時には。なみ治さんもその夜ねてゞあつたから。なにも譯はないとじや。といひぬけのため。ふたつには。はなも變りたし。麻方かねて。出しものなり。龜それがよろしい。あの子のかゝさんは。こちのうちへよう來てじやによつて。ひよつとナア。花そう〳〵。下より小女郎なみ治さんあげます。治くのこゑにて。る。歳は十五六にて。もはや振袖もにあわねど。かしらが無細工なところから。そでつめかねつかふ

客もつかず。ちかく〳〵に。母親が袖詰して。花なみ治やらねばならぬかづきもの也。花なみ治さんおまへ。今宵はざこねをせねばならぬぞへ。浪はい。ト笑ふて市わしが水上して上るは。浪どふぞ御たのみ申ます。花ゑらいませじやなア。亀ちいィと。じあいをいをゝかいな。なんぞおいしいものが欲しい。花いま御馳走がくるわいな。ト いふうち。大平持ちきたる。花車木ざらにつけて皆にやる。

亀どなたもおしらべんか。御先へ。ト しらべてゐるうち。ヲ・こわ。おばさん。煎海鼠を袂みあげて。此こはいものは何じやへ。花それはわたりものじや。亀どこの橋をじやへ。花ゑらいかけとナア。コリヤ。煎海鼠じやかな。亀こちやびつくりした。蛎蝓かとおもふた。市つるもいわぬかほしてゐて。あいさにはずゝによつて目だつ。亀いやいいな。こちやはづした事はありもせんもの。市村さんもてうぶくしィじや。花いや〳〵。下着の裏はやくたいであろ。亀ちへといふてはたべませぬゆゑ。はづす筈がない。市大かた。土用ぼしに見たら。しみだらけであろ。亀ハイ。その時分には。ちと手傳にきて見ておくれ。どんなものじや。市さあ。鈍なものであろ。花市村さんもたゝきこんであるさかい。見る事は目がたかい。亀市村さんはなんでも承知してゐて。いはずじやさかい。こちやすきじや。浪治なあ。あねさん。市村さんのこうせきは市紅さんによふにてゐるなあ。亀こちも。そふ思ふてゐるはい。市そふ二人にほめられては。何ぞ上たい。今夜はなんにもないから。こんど持てきてあげう。花ほんにかへ。市わらいなしんけんじや。花どうかあやの小じの。ふや丁ときてゐる。亀そふ〳〵。あやふやしたものじや。花さつきにから見れば見るほど。市村さんと龜まつさんとは。よいころ合な女夫じやが。なんとかめ奏さん。おまへ市むらさんとこへ。嫁さんにいきんか。亀わたしや行氣でも。市村さんが嫌じやといな。おばさんこのやうな勤はしてゐても。御客といふてはなし。どの樣にさびしう暮してゐると思ふてじや。花そふじや。おまへばかりはそふであろ。ト いな。今ねす時はないせェ。亀なんぼうても。たれもかゝつてくれずじやものを。市わしや去年から。貴さまがきますやうにと。金毘羅や祇園へ願がかけてある。亀わたしやちやらじやない。しんけんじやへ。花市村さん。御酒はどふでございます。もふとりませうか。市もふよし〳〵。花さやうなら。ト あたりのある座敷ゆゑ。はやくまくをきり。そこらをかたづけ。一間の西しのすみと東のすみとに。ねどころ二つしてきたろ。亀今夜は三味せん出さすに

しまふた。花市村さん。サアおやすみ。市藝子さんと仁の字でもだんないか。トはをりとつたまゝねる。花仁兵へはだんないが。

とはならんぞへ。市酒にゑふたらその氣もない。花こゝろもとない預けものじや。トひとよ浪治亀市村さんおゆるし。

し　は。わたしやよぬ。

て　と　ろ　は。市村。花上着をとりいな。しわになろうが。亀

だんないわへ。おばさん。わたしや餘程長田じや。ざこねといふと。いつでもしわいわへ。花おまへ其やうに度々ざこねしてか。亀イヽへ。ふりそでのとき一度と。袖つめてから。これがはじめてじや。花そふかいな。モシ市村さん。わるい事しなへ。市フヽン。

御詫宣　鹿嶋のとふれをはじめ。神さが人にのりうつりていはするを。御詫宣といふ子を。あらい御たくせんじやといふ。

缺徳利　又かけどとも碍していふ。口のかけしとくりは出やすきゆゑ。よくしやべるをいふ。或は惡口をいふをもかけどといふは。くちのわるきといふ事也。又みきどくりといふとあり。これは風俗のにたふたりづれ。其外すべておなじやうなるが並びしたとへ也。かけどとは同じからず。

仁兵へ　ふたり寢るとをいふ。こゝろは人べんに二の字ゆゑ。ふたりねてゐるといふと。これは茶や。げいこによつていふ事也。いつたうには通用せぬなり。

野暮輔評曰　この條さして評すべきとなし。既に作者の目標に記せし如く。主客ともに一ト通りの代呂物といひッべし。去ながら。此客の風俗無雅の野暮にあらず。をりふしの洒落には。この紘妓と花車とを連て。南禪寺から眞如堂などゝ流しあるく人物なるべし。紘妓もまた商賣に身をいれる御陰には。正月六月の千壽は。苦もなく月五百なれの株なるべし。御出精〳〵とはいらぬ御世話なるべし。

許情雜魚寐

斧八五郎　としどろ三十二三。色あさぐろく中じょうよりすこし肥めなるかた。なまかべの結城つむぎの上着。かんとうつしの行戸仕立のをび。せんさい茶の毛どろめんのはをり。此斧手ちれん中へも一二年は入たかほにて。よろづきいた風なり。茶やも方々へゆき。まい夜〳〵この里へくるゆゑ。げいこにもなじみ大ぜいあれども。この飾どのげいこがいろで。惚つてゐるといふともな。花車八さん。このあいだは御見かぎりで。一向おいでなんだか。をほかた外へおゆきたのであらう。八イヤこのじゆ内で。大かすをくわされたから。二夜さ橋をこえなんだ。花車うそを。たれぞ知らせませうか。八子ども

はおそふ知らすがよい。花が少なふついて徳じや。まあ盃いちのまふかい。花それでも。おそいと名ざしの子がなりませぬぞへ。八ならざなほよい。花ゑらめれつじや。そしてお肴は何にしませう。八なんでも見合て。ぬしの腹にはまりそふなものがよい。今宵はあけた手代じやないか。ト二かいへあがりませう。ト二かいへあがる。これはいつもつね下でのめど。今よひはむねに思案のあるとゆゑ。二かいへあがりしなり。花なんぞお好みればよい。ト小めろに肴をいふてやり。座ぶとん火ばちさかづきなど。二かいへはこびあ。ちよとおしき。トざぶとんをいだす。八どふか今夜は大じんらしい。トこれより花車とさうち。しやれあれど畧す。花たつた花三ツおかいんか。八ずいぶんよぶか。ちつと相談がある。花あらたまつたなんでおます。八これから松江をよんで。ざこねをするによつて。おまへねさへ來て寐ずと。したじから。ぐあいのあるやうにして。ねさしておくれんか。花それはあの子さへ承知なら。どふでもよろしいが。しかし。あの子はおまへさんの腹へはまる子じやないか。なんぞくり出しなさるのか。ト小めろをよびて松江をいふてやる。市くり出すともないか。ちとたづねたい事がある。つゐ一くちですむとならよいが。入くんだとで。はなしがながいゆゑ。三ばい買のじや。花それでも一通り。わたしがねきで寐ぬといふ事を。あの子にはぬと外へいて。わたしをてうぶくするよつて。はなして見て。それでも嫌と。あの子がいふたら勘忍しておくれへ。八わしがあの子にほれてはゐまいし。うとおもふ腹はなし。たゞむりなざこ寐で。下手をうるばかりじやが。今いふてのと。わしがきかぬ所でいふてほしい。花それは承知じや。トいふてゐる。うちの下より。ハイ松江さんあげます。松江くるりなるかたなれど。としは廿二三。いろ白く。少し小づくはなが筋くちもとよく。ふたかは目にてまゆじりほそく。笑ひがほ。こぼれかゝるほど愛あり。着付はなんど七ゝ子の。すそに鶴菱のぬいとり。下着は生かべちりめんに。光琳の松を。かのこ入に染めたる下着ふたつ。くりかは鳳つうのおばさん。此あいだはおとうきんいりをび金入の帯。しう。八さん。きつい氣わるで。ちよつとも知らしておくれんぞへ。八なんじやい。歳暮のしうぎか。彼岸の茶の子じやあるまいし。あげますといふて花をつけるもおかしい。松えいゝへ。おまへさんじやによつて。花もつけませぬ。花車八さんも此間うちは。とんと御出なんだ。松えいま扇九から。もつたとこであつたが。こゝからよびにきたによつて。八さんにしては時刻がをそし。どふいふ御客じやしらんとおもふてきた。八内ですやを引ていた。てれかくしじやないか。松えい勘忍しておくれ。わたしじやてゝ。ひいきに

してくれてじやお客もござります。八どふりで御客がたくさんあるかして。今夜はつむりも衣裳も大ぶんねうちがある。しかし此ちうまでは。おつめさんの通ひにとまつて。升やのくらへは入ていたのじやないか。おつめは質おきして料に百匁ヅヽ、升とるしちやばゝ。升やは御存の質や。

松え ソリヤはじまつた。久しいもんじや。わたしも近來は十まげもやめました。わたしのやりさきは升やじやござりませぬ。大黒やでかります。花車 ホンニ。それについてわたしの所には。升やから歳暮に小豆がくるが。粉のない衣裳でも出したり。入たりするよつて。半季に貳三匁からの日あいをやるから。けつかふなお得意じやないィな。松江そふかいな。こちのところには近來やめてゞあつたから。もうあづきもこんが。もらふて外聞のわるいは。あこの歳暮ばかりじや。八やめたもをしがつよい。内へは賣たからだなり。店にはしきがうんとあるし。御の字のくちへは書こんである。もし今やどしんだら。首とからだとあしと。三ッぎりにしてわけざなるまいが。松え ぎゐんのわるい。もうおきんか。花車 かげどゝいふても。八さんほどのお方はあるまい。松え あれわな。今日はこういをふ。明日はどういふてと。うちで思案しておいでるのじや。こちややすう言われても。八さんの座敷はかまはんけれど。まいばん來てゐて。外なおかたばかりよんでじやが。腹がたつ。花車 今夜もきゝいな。はやう御いでたけれど。すのみにのんでゐてじやから。たれぞ一人よびんかと。せんど/ゝすゝめ出したのじや。八こゝなおばきが。松野をすゝめたけれど。花車 アノまあしらにせが。よふ言われる事じや。八それでも。ゐれとのろと。一字ちがひじやよつて。どふぞ。まつえにしてくれと。手も足も合せてたのんだのじや。松え なに事も。そこをよろしうおとりなしを。花車 あの子も北方のくせに。やみちうじやな。松え ア、すぢじやわへ。八もう。符てうことばおかんか。わしやちよつともわからぬ。松え ヲ、こわ。わからぬやうなお方じや。八ときに。貴さまに一生のたのみがある。きいてくれまいか。松江 あなたの事なら。何でもきゝませう。八ちやらのけて。しんけんに醉たから。今夜はとまる氣じやが。ひとり寐るもさむし。きさまとざこねがしたいが。毛も引きやせぬから。帶も衣裳もいで。あと たやうにしてくれぬか。松江 わたしや。どふでも致さうが。どこぞから箭のいりそふな事じやないかへ。八そふいふ暮もない。松え どふやら丁ちんもちらしい。八どうして/ゝ。

トいゝながら手水に行。あとにて花車に相けんさすつもり。花車も八がゐぬまにざこねのわけをはなせば。まつえも承知して笑よて　花車　御酒をゐるところへ。八五郎もどる。

とりますから。最うおやすみ。八これでとろふ。ト茶わんでゐれ。ついでおくれ。花車其うちにそこらをかたづけ寐どころをする。松えてうしに手をあてゝ見て。ちとぬじやぞへ。ト つ　ぐ。八ぐつと一口　サアゐれ。繻絆ひとつできておくれ。ト る。花車松江さん。おやすみ。ト ふすまをさす。松えハイ。ト た　に　は　。八えれ。わるちやれはせん。しんけん尋ねる事があるから。こゝへおはいり。松えアイ。のゝ　や　。ゆ　と。八よいからいふ通り。どふぞすゆ。

とてておくれ。さる氣なら。もかまはぬけれど。聞たい事もあるし。ひとつには

おもふてじや。松えはし　ゐ　だんないかなア。て　。ゝと。八一ぷくのましんか。松えアイ。ト八五郎が煙管をとつて。自分のたばこをすいつけてやる。八かんにんへ。トもたせておいてのむ。松えしつれいやの。八ヨットよし／＼。松えまたつけよかへ。八もういや。松えなにがきゝたいのじやへ。八貴様の店の小まつと貴公とは。わけて心やすいじやないか。松えア、心やすいが。おかみそりのくちかへ。八いゝへ。その口なら何もたづねるにはおよばぬ。松そんなら。おまへかゝつて見るきか。八その氣もないが。じつは心安いものにたのまれた事があるによつて。問ふのじやが。あれは〆てゐるではないか。ト い　ふ　は　うそにて。まことは自分が氣に入た小まつゆへ。かゝつて見やうと思ふて。疑はしきものをくりいださんとのたくみ也。店の男をしめてゐるかとは。遠いところからかけたるにて。實はちちにゐる兄がうたがはしきゆゑに問なり。松それはうそじや。あの子にはきん／＼ものがある。八それは誰じや。松おまへお知りんか。つくつきじやがな。八それはあの兄じやといふて。内にゐるやつか。松ア、それじや。もとは大坂で御客であつたけれど。あの子ゆゑ。うちを出てじやのじやさうな。あの子もあの人ゆゑ三四ねんまへから京へ來て出てのじや。去ねんのあきも小さんしてゞあつた。それでもわかつた御方じやよつて。御客もとらしてのじや。八フンさふか。實はわしもかゝつて見ようと思ふたれど。それでは一ト まわりもいやじや。松なぜに。八はらはうるかひがない。ナントものも相談じやが。貴さまわしにかゝつてみんか。トいふはくり出す事ばくりだすし。松えにほれてはゐねど。もしたらしどくと思ふて。松わしやいやいな。八いやかく云也。なは遠から承知じやけれど。ほれたが因果じや。松さ様かいな。トちら／＼目をふさぎ無首。八嫌たか。ねたらなほじや。ト る。松大ィきらい。おきんか。八嫌いかしら

んが。おれはすきじや。ト　て　る。松

それはおまへの粋に似合んせ。ト　け。を

す。あ八粋も不粋もかうなつては。ぬ

れぬさきこそ露をもいとへじや。いや

なら北山なり　。　。松ひつかう

してじやと。下へをりるぞへ。あんま

りあほらしい。八もとより其やうにほれて

はゐずぞ。こいつとでも

と思ひ。　。きさまも。けふ此

ごろ出た子じやあるまいし。そのやう

にぼんつく事はないじやないか。面白

うもない。　委細かまはず高鼾。松伍もと　より

すこしほれてもゐるゆゑ。なに事も承知でざこね

もするし。とに久々ひいきにしてもくれる御客

ゆゑ。いやとはいふたれど。あまりぼんつきすぎ

ると氣の毒におもひ。八五郎がねがほを見れば。

何やら腹もありそふにおもわれて。　八さ

ん〳〵。八ム、なんじや寐むたい。松

一向　。もつこい

。八イヤ〳〵　また叱れる。

松もう勘忍じや。わたしがわるかつ

た。こ　ら　い　。　ぶ。　。

八さむいか　。松、　。

十字曲　とは。十の字をまげれば。七ソ字

也。震蹬といふ事をりやくして。

十まげともいふなり。

北方　わかさより。ぶきの者をいだすゆゑ。

ぶきなといふ事をいふ符牒なり。

闇中　とは。しらぬ事もしつたやうにいふも

のをいふなり。やみの夜はくらきもの。

又本などをちうにおぼえるゝいふから。

自分のしらぬ聞きとをよくしやべると

いふ事也。それをまちがへて。

アミチウといふ子も多し。

筋　今は闇中と同じこゝろ也。しらぬ事も

知つたやうに。大ていはなしのすぢに

ていふから。能かげんなとい

ふものを筋右衛門と云。

御刺刀（刺）　とは。一向宗には御刺刀をさづかる

といふことあるを。もつて。わけの

あつた子を。御かみそりのくちとい

ふは。授かつたといふこゝろなり。

弭付　とは。荷棒にあるつくの上也。つくあるゆゑもつからの緒のかゝりになる故。かゝりてゐる者がついてゐるといふ符牒也。

野幕輔評曰。

八五郎もと小松に心ありて。彼が身の黒白を探出さん爲に。松江をよび出したる所。小松は案の如く情夫ありときゝて愛念を斷しより。一ッ衾に添寐したる松江にふつと意うつり口說かけしなれば。松えも一度は蹴る筈なり。しかるに八五郎。ふかき執心ならざれば。小腹をたて寐入らんとするとき。松えおもひかへして持かける所。うはきのありさますべて妙なり。このゝち松え一だんの手際あらば。八五郎後も前へもゆかれぬ場所にいざのふ。工夫さま〳〵ある

べし。八五郎もいま一器量ある眞の通人なるべくば。奏江がもちかけしところにて。ポンと蹴かへして。狂言を下にをく手管あるべし。互にそれにをよばぬは。雙方同位のちから競にして。角力はまづあづかりなるべし。

河東方氏

方氏家乘

下

下　らくま箱

下　らくさ絵

相識

客 千太郎 としは廿六七にて一とふりの男まへ。本八丈の上着にせんさい茶のりうもんの羽織。しまちりめんの下着。くろちりの頭巾をくび にまき。てつちに提灯をともさせてきたる。 亭主 良を見て。 千さんようおいで。おくま。千さんがおいでた。 トいへば。花車も中ゐもと。小めろまで。とんで出て。千さんといふものあれば。且那さんといふものあつて。手とり足とり。上へあげる。 花車 おくま この あいだ 此間はお見かぎりでござりました。 小めろ 三さんおあがり。 てつち ハイ。トこしかけてゐる。 中ゐ もし小たけさんが。ゑらこりでござります。 小めろ。茶たばこぼいだす。 花車 きのふもけふも。あなたは御出んかといふてみへました。 千太郎 あまりこりそふな事がない。 トくちではいへど。尋ねて きたと聞て内心まんぞく。 花車 絃妓さんをつけましても。すつといかれては腹がたつが。あの子のやうにこつてくれてじやと。茶屋もどのやうにうれしいナ。 これらあるやつにて。げいこの氣のきいた子なれば。これはよい客じやと心でうなづき。その茶やのまへをとふれば。ちよつとたづねて見たり。また寶の遠い日にはわざ〳〵いて見たりすると。十べんに一遍いであふと。客をたよ〳〵ととくしんさす也。またいたらんげいこは。茶や氣をきかして。いつかの何時ごろには大かたお出るによつて。こちへきて見なされの。または客がしたではなしてゐる内に。下女にあすのおかずにみづ菜とつて來ておきといへば。下女もかねてこゝろえてゐる故。ハイとやかたへ知らせにいて。いまきてじやゆゑ。かういふでおいでといへば。子どもゝ承知にて。門ぐちから千さんはおいでんかととへば。やれはいりとよびこむ也。客は中のまへに。このやうす見てけかねん〳〵呼ねてきたるといふたも。うそではないと。これより大きには まることあり。 中ゐ 小たけさんとさゝ野さんと。みどりさんとをきいて御いで。 小めろ ハイ。トいて行。 花車 サアおくへ御出。 千 三吉あかつてまつてゐい。 てつち ヘイ。 みどりき みどり たり。 みどり 小たけさんかへ。 トいふは千太郎が相かたゆゑ。一ばんに來てみべきがゐぬ故也。 花車 いまおいでる。 みどり 千さん此あいだは。鑄掛でさぞおたのしみ。わたしのやうな光琳は。たれもつれて行てかない。 花車 イ、〳〵外のげいこさんは一人もなしに。あさまゝをたべにいたのじや。 みどり 千さん。つれて行かずのかわり。朔日のやくそくを出しておくれんか。 千太郎 フヽン。 トわらふ てゐる。 花車 ホンニ 久しうやくそくもしてあげずじや。一日出しておあげ。 トいふうち小竹。さゝの。きたる。 みどり おそひ出じやなア。 小たけ としは廿五六すき

がみに。瑚珊じゆの玉を入たるかんざし二本。勿論すがほにて。くつきりと色しろく。鼻筋よく通り。口びるうすく。せいもすらりと高く。見るから此黒の何がしとおもはるゝ代呂もの。おく山ぞめの羽二重にくれ竹のもやうの白あがり。おなじ小もんの下着二ツ。むらさきの山まゆ入の紋ちりのじゆばんの裏。すこし乱れかゝりたるまゝにて。花色のわなな天だてうもんのきりをきらせたる帶。イヽエこんやはおいでんかと思ふてゐた。[花車]それはなせへ。[小竹]さつきに花からもどつて。店でたゝみざんをして見たら。今夜はおいでんとあつたゆゑ。しんきにはあり。内へいんで。べゞきかへて。もふどこから呼びに來てもすらすつもりのとこへ。男衆が來て。おすきなとこでござりますといふたによつて。いつこうれしかつた。といふは手也。實は大かた外の客へいてゐたけれど。こゝいなうちからと男がしらせたゆへ。ばやいをきつてでゝきたのなん。何分客をとくしんさす詞也。[花車]わたしもおきせんを拵へて。あのやうにいはれてみたい。さゝのそりやわたしの事じや。おまへにおれができたら騒動じや。[みどり]千さん。弁庵さんはへ。これはいつもつれてくる弁慶醫者也。[千太郎]こんやは聲がせなんだ。[小竹]アノきんつぶは大きらい。こいでてうどよい。トいふは弁あんが付てゐると。無心事がおもふやうにいはれぬゆゑ。[花車]ちと商賣はじめんか。[みどり]さゝのアイ。ト三みせんを出し。うたひとつふたつ弾く。こういふ時には。あいかたの藝子はひかずと。哥ばかりつけたりだまつていたりする也。しかし相客あればやはりひくものなり。[さゝの]小だけさん。おまへのはらな哥をひいてかそか。ト三みせんを上げて。

〽わしもたび〳〵戀をばしたが。せんごわするゝこひはいま

[小たけ]わざと少しはづかさゝ野さんもふおきかか。[花車]千さんあれをうけてゐゝかへ。[中居]さゝのさん。こりやどうせう。トたゝみをかく。[さゝの]こちのあれは來てくれんかしらん。あじな氣になつた。これは此げいこ三人とも平生こゝろやすく。やかたも近所と見ゆるなり。げいこどし。こんどあの客がきたら。こういふ哥をひいてくれ。またはこういふてわしをなぶつてと頼んでをくと也。けつなげいこはたのまいでも客よりあひかた次第でよんでくれるゆゑ。ふたりをよろこばすために此やうなうたをひく事もあり。また外でみどりの客の座敷へ。小たけがいつても同じ場合なり。いづれ。こつた紋妓ができると。そのきやくがなんぼう氣に入た子があつても。いつともなふ相方のあいくちの紋妓ばかり呼ぶやうになつたら。[みどり]さゝのさん。此あいだ風呂でおまへの妹さんみたら。びつくりするほどいつかうなつてゞあつたなア。[さゝの]あゝ背ばかり高ふなつてやくにたゝぬ。[花車]稽古にはどこへやつてじや。[さゝの]けいこにやると。膝付から。きわゞ〳〵のつけとゞけがもめるによつて。手ほどきに内でわたしがをしへてゐるわへ。[みどり]きつい穿山甲じや。[ふたり]ほかばなしになつたがかんにさはり。さゝ野があちらむいてゐるをさいわゐ。紙をまるめてあてる。これいたらぬきやく也。外のはなしをやめます。

ためならばまだしも。茶やなれぬ客はよき事におもひ。いつまでもするなり。またけいこのひざへ盃をなげるもあり。はして鉢をたゝきたり。三味線のうらをたゝく客は。をとこぶり よくても多くきらはれるもの なり。小たけ かみをあてるとはおきいな。みどり 千さん一けんさんじませうか。千太郎 をしへてやらふ。みどり おばさん一つついでおくれ。千太郎 もふ酒はいや。みどり それならこふいたそ。おまへさんおかちたらわたしがたべるし。わたしが勝たら朔日の約束しておくれへ。ト打てみどりまける。男にはまけうちじや。トさけをのむ。千太郎 ときに三きちはどふしてゐる。中居 をもての炬燵でようねてゞござります。花車 千が心中をもふすいし。御酒をとりませう。千太郎 よかろ／＼。さゝの まだ四ッそこらじやものを。もちつとをいてくれたがよい。みどり さゝのさん。そんな事いゝな。小たけさんの心にもなつたがよい。花車 此あいだもおとまるし。こんやは子供衆さんも待たしてあるし。はやうおかゑるがよい。みどり それならいんであげませう。其かはり朔日はよろしいナア。小たけ きついおんにきせやうなア。さゝの 千さん。わたしもなア。小たけさんよろしう。千太郎 糸へんにはあやまる。貴さまはけんにまけたじやないか。さゝの まけてあげたからしておくれ。小竹 こちや重箱じやけれど。ばやいしてくるから。みんなしてあげいな。みどり 此あいだ。外へ花にいてゐた所が。ふすま一つあちらに。あいかたのあくのをおきやくがまつて。醉ふてねてゐなさるねきへ。振そでの子がいて。どふぞ一ッしておくれいなァといふてじやを。こちらからきいてどのやうにおかしかつたとおもひじや。小たけ それ／＼ようある奴じや。此うもげいこ三味線をしまふて。さゝの みどり 朔日はおありがたふ。へんがへはなりませんぞへ。段〻おありがたふと。トかへる。中ゐ 千さんあちらへ。トこたつのある間へ。ねまをとり。二人をすいつれて行。茶たばこぼんをもちきたりて。ぶんおたのしみ。トふすまをさす。千 ときさまどこぞ悪いか。小たけ ば一。竹 いゝへどこも悪ふはござりませんけれど。トあじな良付していふ。千 それでもすきがみではゐるし。かは色もわるいさかい。氣にかゝる。竹 そのやうにおいゝからいひますか。此あいだちう。どのやうに心づかひをしたと思ひるいなア。千 なせに。竹 おまへさんによふいふた伯父さんがきて。かゝさんや。わたしにまた無心をいふてじやれど。そふ／＼おまへさんにもいはれず。外にたのむお客とてはなし。だん〻ことはりいふたれど。無理ばかりいふてじやによつて。わたしもつむりの道具を出して見せたら。遠慮もあろうと。思ひの

外。きゝいな。それでこしらへていんでゞあつた。あんまりで腹もたつし。外聞もわるし。それですねて。なじみでないお客へは。はなにもいきません。ア、まゝよ。もちつとのしんぼうじやと思ふて居ても。あんまりの事をいふてじやによつて。いつそ死んでしまいたい。ト大にふさげて見せる。千それは尤じや。わしも早ふ引したいと工夫してゐれども。今は内の工合が。もそつとむつかしい。しかし。春は番頭が別家する筈じやによつて。そうすればまたのかしてくらさすか。町へとりよせるかするゆゑ。今しばらくしんぼうして居い。竹それはうれしいが。わたしの身にもなつて見ておくれ。義理あるじやじんの親をもつて。どふしんぼうができるものじやぞいなア。千それでも今まで。いつしよにねたではないか。竹わたしも。しら齒のときには。外へもいていたし。とゝさんのいてじや間はよかつたが。女のをやといふものはつめばかりで。御客をとれば金のなる木でもこしらへたやうに。それもいへ。これも賴めといふてじやけれど。わたしやおまへさんを。ほんに／＼一とふりの御客のやうに思ふてゐぬゆゑ。大てい氣づゝないめをする事じやないわゑ。千そして笄でなんぼほどかつてある。とへど答なく。さし何もそのやうに俯伏しまゝゆゑ。あんじるとはない。いふて見たがよひ。竹モウ／＼いふまいと思ふてゐたけれどナ。アノ八ツほどじやといな。どをぞこふしておくれんか。わたしのきる物で。三匁ほどこしらへるよつて。五匁ふん別しておくれんか。千それほどづゝなければ。工面してやろう。竹つらふなふていふものかいな。そんならどふぞ持つて來ておくれ。ア、うれしい。トながら。こんやは御とまりんか。千いや／＼早ふいなねば。内の手がたがやける。竹ヲ、しんき。も　こ　おい。ち　お。　こ　ろい。　。き　中ゐもしおゆるし。トふすまを少しあけて。千さんいま更でございます。どふいたしませう。

鑄懸　先年大坂にて。夫婦づれにてあるくゐかけ師があつて。評判たかゝりしより。相かたとふたりづれで歩行事を。ゐかけといふはやり言葉なり。

置錢　とは。こつて通ふときは。錢もたくさんにをかねばならぬゆゑ。なじみをおきせんといふ也。それを町にてもわけあるを。おきせんとはいふ。

金藥　とは。もつさりじやといふ事也。うへは金にてよく見ゆれど。なかゞつちじやといふ事にて。なりはゆすつても。心がすいでなくにぎり客をいふ也。

穿山甲　とは。つめじやといふ事にて。せんざんかうは爪もあるし。かうがかさねかゝつているゆゑ。ちよつとあたればどこいでもかゝるといふ心にて。合羽の

裝ぞくといふとおなじとなれど。近來あまりいはぬと也。

糸篇　とは。やくそくの約ノ字のへんにて。約束のことなり。きんらいはたえていはずして。多く束といふ。

光琳　とは。画師の名なり。此人の画はかたち俗にぶさいくに見ゆるゆゑ。良かたちのよろしからぬを。くはうりんたちともいふ。

愛慕。本文にあざやかなれば。評註に及ばず。諸君よろしく御推もじと云〻。

同心

野暮軸評曰

千太郎の人から〇持の息子株と見えて尤よし。されども座敷つきのいまだ青く若年のありさま見えたれば。小竹が爲にはいはゆる羽子板で蝶〻なるべし。またすき髪を問れてよりの着こみは澤山ある手の無心なり。千太郎ごときのボッコリ息子なればこそはまつたれ。少し修業のつみたらんものは。サヨカイナともいふべからず。小竹が虚實。千太郎の

客万介　としは三十四五。背たかく。いろ青白く。すこしみつちやはあれど。いやみのない男ぶり。かんだいじのはおりに。同じ上着をきたところ。たれが目にも年あき前の番頭と見ゆる也。さる戸をそつとあけてはいる。

うめの　としは貳十四もつとも時刻ひるすぎごろ。五に見ゆれど。實は廿七八にて。器量よく。背すたかし申ぶんなきしろものなれど。大の爪ちしきしろもの。藍ぎしの内着。うそよごれたるわた人。おしろハでしらかべのやふになつた紫りんずの。じばんの衿りをそへ引くりかへし。糸にしきの中帯をゞたり。風呂からいまもどつたと思はれ。手ぬぐひではなすぢをふきながら。あがり口にかたひざたてゝ。小間物やと。何かはなししてゐる。

尤下着なしでは寒いやうにおもはるれど。惣たい出てゐる子どもは内にさへゐれば。こたつへあたつていたり。またはねてばかりゐるゆゑ。下着をきている子どもはまれなり。

万介さんおいで御上り。常にこの新地へ入こむ小間物やゆゑ。それと見てとりマツといふていぬる。万介あがる。はゝおや奥にてふるつぎを引出してゐながら。

母親　万介さん。ナゼゆふべ御いでなんだ。よい着をもらふたに。

万介　さふかいな。ゆふべもこふと思ふたれど。また歸りがたいぎなと思ふてやめた。

母　さういふおまへさんの心底じやによつて。あれがやかましいふのじや。

梅野　おまへ門ドくちで。ナゼかんがへてはいつてじや。

万　きゝなれぬ男のこえがするゆへ。おさしつかへもあらふかと思ふて。

梅　ハイわたしのうちはよそと違ふて。憚ながらたれも指やうな人は御いではしませぬ。

万　わしはまた。きさまのあみによい鳥でもかゝつて。みつ子の手をねじるやうな。せりふでもして

ゐる所へはいつてはわるいとおもふて。梅よい鳥がかゝらうが。かゝるまいが。いかひお世話さんじや。母またはじまつた。万介さん。マアこゝへきて炬燵へおあたり。万ハイ。トおくへ行。こたつへあたる。うめのてぬぐひを銚だいのうへにをき。ぬぎすてゝある茶じゆすと。むらさき縮緬のつぎ〳〵のでんちばをりをきて。万おはな茶を一ツおくれ。小めろ お花ハイ。トお茶をもちきたり。おちやをあげますかはり。万介さんなんぞおたてんか。万こいつはゑらい貳分金じや。わしがおばさんに。ぜにを三文かつてやるから。りうきう芋などかふてこい。お花ア、きたな。ナンボわたしがやうなものでも。お芋ぐらゐはほしければ。わたしの錢でかふてたべます。母さうじや〳〵よういふた。梅ヲハイわらへ。万わしも男のはしじやが。こゝへ來ると十九文見せか。小べんのかへものゝやうに。やすふあしらはれる。梅それじやさかい。とんと御いでんがよい。万三日來ずにゐたら。泣くじやあろ。梅ヲ、身あがり。なにが悲しうてなくものか。てうどよいナアおはな。万よふいふた。これからとんと來んによつて。來ておくれと為おくすまいぞ。梅なんの罰にやるものか。御持參も大体がよい。万フン。いまはぼうしにはち巻で。つよい事をいふているが。あすはア、いわなんだらよかつたにと。悔まうけれど。ア、まゝよ。ドレかげでとんぼのしりといわれぬうち。もう歸りませう。母ねぎで聞いているうち。せり合がだん〳〵あらくなり。ひよつと二人ながらもふおきんか。のちにはまたたゝき合たり。つめり合をふとおもふて。それよりは万介さん。しんけんに。なんぞおたてんか。よい頃合じやがなア。万天井を見て。こゝなかきもちはどこにあるか知らん。母そふぢらさずと。ほんまに何ぞおたていなア。万來がけに繩手のさかなやに。てんまやのよいのをみておゐたから。あれを燒いて肴にせうか。梅おきんか。てんまやがほしけりや。わたしがたてます。母はらぐすりに鉄がたべたいナア。梅さやうじや。てつにしなされ。万それならお望みどふりにするが。親子いつしよにしんでも此ほう。かゝり合でないといふ一札がほしい。母何枚でもいきます。おはなちよつと一嘉へいてあるか見てきて。花ハイふぐでござりますな。トでゝ行。あとへ女ひとり。すぢたてやくしをかみにつゝんできたり。おゝきに遲なはりました。梅ア、まだすかずにゐるわいな。コヲト。どふぞ翌きておくれと。お六さんにいふておくれ。六とはかみゆひの名。玄はいそふ申ませう。梅大きにごくらうさんへ。玄イヽへ。トかへる。と

れば蒙紐のでしにて。かみゆひよりさきへまはり。そへをとつたり。つとしんに油をつけたりの手傳をする也。よくはやるかみゆひは。弟子をふたりもつれてある く也。さて此里のかみゆひは。いづれも二季のしらきのほかに。他所ゆきでもすると。一ぱんにかみゆひにはりこんで。みやげをやる也。それほどにせねと。い ふやうに来てくれぬなり。

万あれがつめたいのか。

梅イヽエ。あれは弟子じやへ。

母それでも御亭主さんはすへやしなひにあふて。けつかうなもんじや。

梅いふうち。下駄のをとがして。相長雪松おばさん。

屋にゐるげいこ雪まつきたり。

きのふはおやかましう。

梅雪松さん。

御出。マアおあがり。

雪アイ。トあがり口へ腰をかける。

万雪まつさん。こゝへ御出。

雪どなたかと思ふたら。万介さん。此あいだは御遠ノ〜しう。

梅それはきのふのかへ。

雪ア、よう見せておくれたけれど。まあ御かへし申ます。ト持てきた箱紐の端ものを

母まだ地合が氣にいらぬかへ。

雪氣にいりすぎてあるけれど。節季のあてがない。

万薪地で五人ともない玉さんで。店のせん香だいに。おまへが。中じくにうごかすにゐてじやさかい。書出しも。留筆もをされて。どうもならんといふせんせいの御方が。そんな事いふものか。トいふは。店のせん香だいのせんかうたてのしたに。店中のこどもの名まへをはつてある也。さて花にゆけば。右のせん香たてにせんかうをたてるなり。その名前のはりやうが。しばゐのまねきの看板とをなじ事にて。ようらうる子を中じく。かきだし。とめふでと。夫〳〵にすへる也。尤若手。中年。貞やくと。段をわけ。また妓を別にわけたるもあり。これはこの店ぎりでなく外〳〵の見せへも外ぶんなり。これも子どもにはりをつけるためなり。よつて賣の遠い子どもはどふぞ書出しにまはりたいとはげめば。中軸。とめ筆はその座をいどかされまいとはたらくなり。そのわけはかきだしにいても二ケ月三月うれがわるいと。外の子をかきだしへまはすゆゑなり。

雪久しう出てゐるおかげで店でもたてゝくれてじやけれど。よふ賣てじや子がたんといてじやさかい。けかしてつらい。

梅いやう〜わとの月も。八百からの花を賣てじやあつたさふな。

雪八百のことはおゐて。どのやうにせい出して。刻花うつても。五百は聲がかゝらんものを。

母おまへがよふうつてじやから。かゝさんは左扇じや。

雪ハイみんなして宜しう調伏しておくれ。ドレいんでかう。おやかましう。トかへる。入ちがへて花もし。ふぐはござりませんはなかへる。

母龜平もきいてきたか。

花イヽ、へ。一嘉とおつしやつたから。外はきゝませなんだ。

梅たいてい知れたもんじやか。

母なけりや。早うもどつたがよい。なにをせうだんして居たのじや。埒のあかぬ。わし一ト はしりゐて見てかう。

万それは御くろう。外になんぞ小ばち一ッいふておくれ。

母どんな物にしませう。

万なんでも。銚さへ安ければよいじや。

母久しいものじや。トゝ

ゆく。梅小どもにて。万介さん。おまへかゝさんの前では。やすふ見られんやうにしてゐておくれ。おまへの氣では無心でもいはれぬようと。またしても〳〵しみたれた事をいふてじやけれど。むりに無心は。わたしがいわしはせぬ。万それは承知じやけれど。いまのはちよつとしやれて見たのじや。梅しやれも人による。今でもきねをおこして出ていたのじや。何分一ばい飲ましてをけば。御機嫌はよい。トいふているうち。さるどをあけて。花帳を多くもちし男きたり。ハイ。ト帳をおいてかへる。これは男きたり。みせ〳〵におき番。そへ番。三人番などゝいひて。ゆふべ更よりのちをつとめたる男のやくじて。あさのうちに子かたのやかた〳〵へ花帳をあつめにゆき。きのふのひるよりの帳合して。花かずとちや屋の名をしるし。それをまたやかた〳〵へくばりもどす。それよりきうそくするなり。もつともよふうる子とうちぬ子は。帳にもうすあつありて外ぶんにすること也。其とし思ひのほかはんぜうして花帳つまるときは。張のすへに紙をたすことあり。これを帳たしといふて。小かたの方にもいはふことにて。店へも配帳などつかはす也。万介は小便に行てかへりながら。花帳をとつて見て。万このあひだうちは。よふ花がつまつてあるナア。ゆふ〳〵もよいから一ばいうつてゐながら。わしにくればよかつたも押がつよい。梅ハイ。どこなとくつて見なされ。三ばいうつた夜はござりません。ト引たくり柱へかけてをく。万ろくだまに見せもせねば。つよい事はいゐぬ。梅おまへそれから富永町へ御出たか。万イヤ。わたしが花を賣とふていふではないが。ちと御出んと今は神樂講がきびしいゆへわるい。富永町といふは。はじめぐわいのできし茶や也。近來やかたへ行てもそびゝ。やかたの世話もしてやるゆへ。あまり此茶やへ行ぬなり。それが茶やへ知れると。客をやかたへ引込だから。げ札じやのなんのと。やかましくいふ故也。万あすか。あさつての内いこふわい。トいふてゐる内。母をやかへる。母おはな。そこをたきつけて。おむしを摺てたも。梅かゝさんあつたかい。母ア、あつた。もうもつて參じるが。万介さん壹〆四百といふたのを。半分かいました。万酒はどふじや。母ゆふべのこのりが有よつて。足らざあとからとりにやります。梅外のおさかなは。母きゝいな。かめ平へいて鯛の子をたいておくれといふたら。男衆がゐらいはらゐぐりじやといゝをつた。万鉄はゐんでいやせぬか。母わたしも其だめヲをしたら。新らしいもあたらしい此うへなし。それでもこはけりや。どく味にさんじませうか。と笑ふてゐよつた。トかれこれするうち。着屋より持きたり。母親かげんして。もちきたり。こたつへあたりながら四人さいつおさへつのむ。梅鯛の三ばい酢がほしい。おたてんか。万それは今度にせうまいか。梅おまへのやうな軍次兵衛には。もうなにもいはぬ。此うち。四人のしやれあれど略す。

店の男きたり万介をみて。あれがきてゐるなと。おもひながら。おこしらへでござります。梅どこじやへ。男ハイ。いづゝでござります。梅すらすよつて。よふいふておくれ。母コウよい所じや。壹ッのみんか。男おありがたふござりますか。ちよつとへん事せねばなりません。ト出て行。これはぐはいのないこの子のやかたで。客のながしりしていると。すやひくと思はれるもつらし。またはどこのお返事がござりますと。男がいふてくれば。客もにはかによそへやるも心遣し。よんどころなくわが宿坊へ箱を入さすれば。花もうれるし。兩だめに小めろをかいものにやる便に。店の男へちよつとふく事あり。惣じてやかたへゆくものに。万介のやうなはかく別。たゞ一とふりにて行客に。よきとあしきとあり。よき客といふは。蟲屋にもあい。またはやかたへ引をけば。なんぞのとき相談するはと思ひ。げいこよりやかたへ引をく事あり。またあしき客といふは。土地のものや。町でも弁慶はだにて。なに事にもゆきわたつた人をば引をけば。すや引じぶんのはなし相手にしたり。また金銀の事にてなく。外に客のふり合を相談相手にする也。母ア、ゑふた。おまへまゝはどふじや。梅ねしなに食べます。おまへさんはへ。万イヤ〳〵。醉ふたうへは飯はいやじや。母そんなら。おはな。おまへと二人たべうから。火をともしイ。花ハイ。ト火をともし。そこらをかたづけ。ふたり茶づけをくひしまふ。此うち。万介手まくらをしてねてゐる。母おはな。万介さんに枕をだしてあげや。そして風呂へいかんか。花ハイ。ト枕をだして。万介にきす。母万介さん。ちとおやすみ。ト枠をとふして。おはなをつれ。どこへか行。万頭を上ゲねぢむいて見て。ヲイはじやは。梅すいをきかしてどこへやら。万フン。梅それでは寒かろうがな。トふとんを出し兩人身みあわせて。につこり。

御持參

とは。あつちに。それほどに思はぬを。こちからはおれに飽れてゐると思ふてゐるをいふ。心はほれた氣を。こちから持つてゆくといふ心なり。

帽子鉢卷

とは。女の腹をたてるをいふ。女はぼうしをきてゐるものゆゑ。はらをたてゝ。其上へ鉢卷をするといふにて。坊主にはちまきのぬけなり。

蜻蛉尻

とは。ながじりするをいふ。心はとんぼは尻のながきゆへ也。

鉄

とは。ふぐの事なり。さる御國にては。ふぐをあきなふ事を禁制ゆへ。てつぽうと異名して賣買するなり。これはあたるといふ心にて。てつぽうといふ。それをまた鉄とばかりいふなり。

冷

とは。ひやめしともいふ。これは小屋出といふと也。もらふためしをくふといふとなり。

起鬼念

とは。腹をたてると也。はらのたつときは鬼の心のやうになるゆへ也。またはたのの惡いの。またはぶすいじやのといふ事を。鬼念ともいふ。キチ手とばかりいふときは。はらたてるとはちがふなり。

軍次兵衛

とは。しわんぼうをいふ。かぶきの傾城倭荘子にある大和の祐國のおやぢ也。此しばゐ御らんの方は御存じ。

野暮補評曰

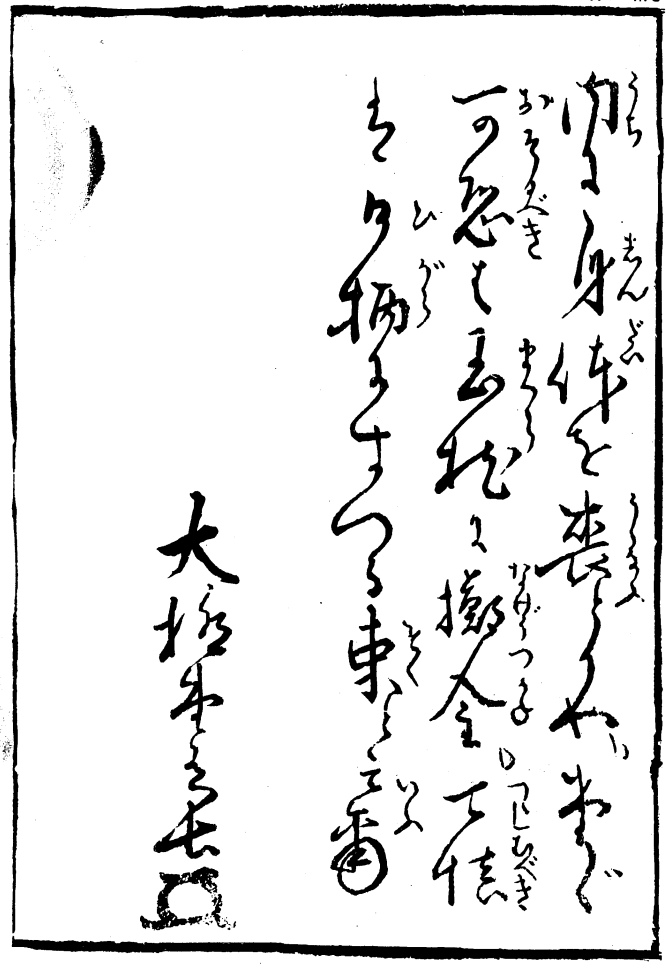
この段。眞の情に似て眞情あらず。すべて館へ客を引ときこの趣ならざるとなし。依て同心とはいふべからず。同心仕掛など名付べし。作者。この世界をうがち得たる中にも。梅野が言葉に。かゝさんのまへでは安ふ見られんやうにしておくれト云ヒ。これら誠に古狐の極秘たる文句にして。意味深長の所也。其余母親の言語動作やかたを目前みるこゝちして。奇絶甘心〳〵。さてこの本文を味はふに。梅野も。母親も。万介を客にするこゝろ言外に見えたり。いはゆるこの万介が身の上は「人は客。われは間夫じやとおもふ客。といふ名言のがれざる代呂ものなるべし。ァ、冷たいかな紘妓のはらのうち。しかしかゝる狂言の世界より。退引ならぬ場にいたり。やみがたくて生涯を其男にまかすもあれども。是等はまだ／＼其處へはいたらぬ形勢なり。とにもかくにも虚實は水波の隔にして。是を押究めんとはいとかたかるべし。凡館に遊ばむ人かならず。情夫とならんとを思ふべからず。唯趣の異なるをもつて一時のたわふれとすべし。茶屋にて遣ふ金銀を。やかたへ蒔てやるこゝろならば。誠に安全無難なるべし。染ちんの廉からんとをおもひ。かつ眞情を得んがために。館にあそぶ人は。虎穴に入て虎の子をもてあそぶがごく。深淵にのぞみて龍の珠をさぐるに似たり。あやふきとのかぎりにして。其甲斐さらにあるべらず。恐るべし／＼。

自跋

大厦之顛非一木所能支
敗屐之仆非一本所能止
三年坂でこけたものは
三年のうちに性命を果し

三味線箱で臥た者は。三ねんの内に身体を喪とかや。たゞ可恐は玉枕に擲金。つゝしむべき可愼は日柄にすつる束と云爾

大極堂有長



天政五年午六月

東都　山嵜屋平八

浪花　河内屋茂兵衛

皇都　三条通柳馬場西へ入町　近江屋孫右衛助

　　蛸薬師通高倉西へ入町　山城屋佐兵衛

娼婦　花街風俗解　大眼翁遺稿

侠客　伊賀丸大人補閲　全三冊　追版

文政十一年子初春

浪華　河内屋茂兵衛

皇都　伏見屋半三郎

山城屋佐兵衛

尾陽　玉屋新右衛門

東武　大坂屋茂吉

書舗